

知床五湖のガイド制度導入に対する利用者の評価

椎名博之

森林・緑地管理学講座 森林政策学分野

【はじめに】北海道斜里町に位置する知床五湖では、2011年からガイド制度¹の実施が予定されている。知床五湖では春から夏にかけてヒグマが頻繁に出没し、歩道が閉鎖されることが多い。これは利用者や地元観光業者にとって大きな損失であった。加えて、歩道が開放されていてもヒグマが出没する可能性は皆無ではないため、土地所有者や土地管理者は何らかの対策を講じる必要があった。そこで検討されているのが本研究で取り上げるガイド制度である。これは、ヒグマへの対処法を習得した引率者が提供するツアー(有料)に参加すれば、特別な場合を除き、常に知床五湖の利用が認められる制度である。ヒグマとの遭遇事故を起こすリスクを減らすことが目的である。歩道利用の不確実性を解消することである。本研究では、ガイドツアーに対する支払意志額の評価を通じて、ガイドツアーの需要予測を行うとともに、どのような利用者がツアーに対する高い支払意志額を持つのかを明らかにし、ガイド制度の有効性について検討する。

【研究方法】ガイド制度に対する支払意志額を評価するために、仮想評価法を用いたアンケート調査を行った。2009年8月に知床五湖でアンケート票を訪問者に800枚配布し、郵送形式で回収した。504名から回答を得ることができ、回収率は63%であった。仮想評価法のシナリオでは、「仮に、あなたが今回の知床訪問を計画している際、ガイドツアーが導入されていることを知ったとします。ツアーが一人***円で予約可能となっていたとします。あなたは予約をして、ツアーを利用しますか?」とたずねた。***円の部分には、1,000円、2,500円、5,000円、7,500円、10,000円いずれかの金額がランダムで入っており、回答者はそのうちのひとつだけに回答することになる。得られた回答をロジットモデルによって分析することで、支払意志額を評価することが可能となる。

【結果】ガイドツアーに対する支払意志額は平均値で2,826円であった。現時点で想定されている料金設定は5,000円であるが、この金額でツアーを利用するのは利用者の20~30%と予想された。しかし、モデルの当てはまりは良くなく、ツアーを利用するか否かの意志決定は提示額のみでは説明できないことが明らかとなった。そこで、回答者の個人属性を変数としてモデルに導入したところ、いくつかの個人属性で有意な結果を得ることができた。例えば、「ガイド同伴ならヒグマと遭遇も可能」、「知床五湖の歩道が封鎖されていた場合に代替的な目的地では満足できない」という回答者は高い支払意志額を有していた。同時に、モデルの当てはまりも改善された。

【考察】支払意志額に影響を与えている個人属性から考えると、本制度は目的に沿った役割を果たすことが期待される。一方で、仮想評価法によって推定された支払意志額は実際の支払金額よりも過大となる傾向が指摘されており、この点を考慮した上で、より具体的な制度設計を進めていく必要があるだろう。

¹ ガイド制度という表記は、調査を実施した時点のものであり、現在は「ガイド」ではなく「ヒグマ対処法引率者」に変更されている。